

# 哲学者は思考実験を手放すべきか？

## 分析哲学の思考実験の説明と批判的検討

古賀野 直樹

古代から現代に至るまで、哲学、倫理学、物理学などの分野で多くの思考実験が考案され、盛んに議論されてきた。しかし、ある一つの思考実験を取り上げ、検討した研究に比べて、学問の方法のひとつとして思考実験一般を検討した研究は少ない。本論文は、学問の方法としての思考実験を検討したものである。ただし、研究対象は分析哲学において議論されている思考実験（分析哲学の思考実験）に限定している。本論文では、分析哲学の思考実験を考察対象として、「哲学者は思考実験を手放すべきか」という問題への解答を試みた。

議論は、思考実験を使うことがそれほど不合理でないように見えるように思考実験を説明し、その説明を基礎に思考実験の問題点を検討する、という方針で進めた。

第二章では、思考実験とはどのようなものなのかについての思考実験に精一杯寛容な説明を試みた。まず、思考実験とはどのようなものかを説明した既存研究が、ストーリーと結論の関係をうまく説明できていないことを指摘した。そして、この弱点を乗り越えることができる新しい枠組みとして、不協和誘発型思考実験と思惟可能提示型思考実験という二つの図式を提示し、これらによって思考実験とはどのようなものかを説明した。

第三章では、その説明を基礎にして、不協和誘発型思考実験を批判的に検討した。まず、「マリーの部屋」に対する批判を材料にして不協和誘発型思考実験の弱点を抽出した。次に、不協和誘発型思考実験が成立するために必要な前提に疑問を呈した。そして、不協和誘発型思考実験にフィクションを用いていることが災いをもたらしてはいないかを検討した。

第四章では、議論全体を振り返った後、分析哲学の思考実験の使用の是非について具体的な結論を出した。それは、ある分析哲学の思考実験の結論について、それが万人が受け容れてしかるべきものであると主張するためには、以下の四つの問題に答えていかなければならないという結論である。

その思考実験のストーリーについての直観と調和するような信念にどのような価値があるのか。

その思考実験のストーリーを読んだとき、直観と信念の間に不協和が絶対に発生するのか。

直観と信念はなぜ調和しなければならないのか。

直観と信念を調和させるとき、なぜ、直観の方を採り、信念を捨てなければならないのか。

（指導教員 横山幹子）